

傾いた松本城

長野県松本市に残る松本城大天守は、現存最古の五層天守といわれ、国宝に指定されています。しかし、順風満帆と今に伝えられたわけではなく、徳川幕府が倒された後、文字通り大きく傾き、倒壊の危機に瀕していました。

（傾いた松本城天守の写真は、ウィキペディア「松本城」をご覧ください。）

近代化を推し進めた明治新政府にとって、近世の城は無用の遺物であり、明治四年（一八七一）に廃藩置県が実施されると、旧藩主は東京への移住が命じられ、城の多くは取り壊されました。松本城も競売に付され、一度は民間人の手に渡りましたが、篤志家の働きによって危ういところを救われました。しかし、主を失った城の荒廃は著しく進み、ついに大天守は西南へ大きく傾いてしまったのです。

地域のシンボルの傾いた姿が、人々に強烈な印象を与えたことは想像に難くありません。そして、貞享三年（一六八六）に百姓一揆を先導した罪で処刑された多田嘉助（ただかすけ・多田加助・中萱（なかがや）加助ともいう）の怨念と、傾いた大天守を結びつけた伝説が生まれました。



長野県安曇野市のJR中萱駅にある多田嘉助の碑